

『姫ちゃん』

「おー、よしよし。はあ、なかなか泣きやまないねえ。おー、よしよし」
「ばあ。赤ちゃん、泣きやんでねえ」
「え？ あら。急に泣きやんだ。今までずっと泣きっぱなしだったのに。あなた、すごいわね」
「いえいえ。あたし、泣いてる赤ちゃん泣きやませるの、得意なんです」
「お嬢さんすごいわねえ。小さい弟とか妹がいるのかしら？」
「いいえ、いません」
「ああ、そうなの？ それでこんなことできるなんてたいしたものね。お名前はなんて言うの？」
「そんなそんな、私、姫です。名乗るほどのものじゃありません」
「名乗ってるじゃない。姫ちゃん？ このあたりではあまり見かけないわね」

「えー、ではこの町内の活性化のためにどういった取り組みをしていけばいいか、意見はありますか？」

「うーん、この町もどんどん若者が離れていきますからねえ。若者にとって魅力のある町づくりをしないといけませんよ」

「うん。で、どういう意見があるんだ？」

「まあ、意見というのは特にないですねえ」

「ないんだったら偉そうになんか言わないでください。他に何かありますか？」

「うーん。なにかこう名産品とかね、そういうものがあるといいですよね」

「ほお。例えば？」

「まあ例えばって言われると何もないんですけども」

「なんなんですか。雰囲気だけで言わないでください。ちゃんと意見がある人はいませんか？」

「はい！ 温泉というのはどうでしようか」

「え？ 温泉？ この町に？ 温泉なんてないでしよう。っていうか、君、誰？」

「私、姫です。名乗るほどのものじゃありません。この町は温泉が出るんですよ。ちょっと地面を深く掘ってみてください。きっと出ますから」

「いや、君ね。適当なことを言ってもらっちゃ困るよ。温泉なんか簡単に出来るもんじやないんだから」

「ご隠居さん、本当にました。温泉」

「掘ったのか？ 今、掘ったのか？ 驚いたね。本当に温泉が出るなんてな。さっきの子はどこ行った？ 姫ちゃんとか言ったかな？ あの子は誰なんだい？」

「いや、最近よく見かけるんですけどね。この辺の人はみんな助けてもらつたって。でも誰もあの子が誰かってことを知らないんですよ。姫ちゃんって名前だけはわかってるんですけどね」

「なんだ、そりや。正体不明の女の子がみんなを助けてるって、どういうことだ？」

「なるほど、混ぜないで川の水で冷ませばいいのか。ありがとう」

「熊さん、どうした？ 嬉しそうな顔して」

「いや、例の温泉ですよ。熱いから薄めて使ってたでしょ？ 管を通して川の水を通せば薄めないで冷やせるんですよ」

「驚いた。熊さんにしていい考えだね。どうやって思いついた？」

「いえ、女のコに教えてもらったんですよ」

「ひょっとして姫ちゃんじゃないか？」

「あれ？ ご隠居さん知り合いでですか？ お礼を言いたいんで、どこにいるんですかね？」

「私も知らないんだよ。姫ちゃんを探してるんだ。どこの子なんだい？」

町のみんなに聞いてみると、誰も姫ちゃんを知らない。どこの子なのかもわからない。気がつくと姿が見えなくなってるって事で、見つけたら報告するようにと、ご隠居さん宅に捜査本部が置かれまして。

「おーい。いたか？」

「いや、こっちはいませんねえ。どこに行ったんでしょうね。いつもはそのへんにいて、よく目撃情報が上がってくるんですけど」

「犯人じゃないんだから。目撃情報って。おーい。そっちはどうだ？」

「見つけましたよ！奴のアジトが分かりました！」

「アジトってなんだ。おれたちはお札を言いに行くんだろう？ そんな言い草はないだろう。で、どこにいた？」

「潜伏場所が分かったんです」

「犯人を探してるんじゃないんだよ」

「こっちです」

「ここか？ ずいぶん汚い家だなあ。本当にこんなところに姫ちゃんが住んでるのか？」

「はい。間違いありません。たった今、この中に入って行くのを見たんですから。他にも複数のタレコミが」

「だから犯人を探してるじゃないんだから。じやあまあ、行ってみるか。（ノック）すいません！ どなたかいらっしゃいますか！ …失礼しますよ！（開ける）暗いな。留守じゃないか？ ん？」

「誰じや、その戸を開けるのは」

「おい、爺さんが一人で座ってるじゃないか。誰だ、適当な目撃情報を流した奴は！ あ、すいません。ここに姫ちゃんって女の子が入って行ったという話があったんで、来てみたんですが、間違いでした。失礼しました」

「待てえ」

「はい？」

「わしじやあ」

「え？ なにが？」

「その、お前たちの探している姫ちゃんというの、わしじやあ」

「だめだよ。この爺さん惚けちゃってる」

「待て待て。わしは惚けとらん。わしがその姫ちゃんじや」

「えーと、ちょっとやべえところに来ちゃった。失礼します」

「待てえ。話を聞けえ。お前たちは姫ちゃんに礼を言いに来たんだろう。わしが姫ちゃんじや。言ええ。ほれ礼を言えええ」

「だいぶイカレてるぞ、この爺さん。もう行こう行こう。ん？ ちょっと待ってくださいよ。じいさん、なんで我々があの子に礼を言いたいということを知ってるんですか？」

「何でも知っとるぞ。言った通り温泉が出たじやろ？」

「え？ なんでそんな事まで知ってるんだよ」

「神様だからじやあ。そして姫ちゃんじや。名乗る程の者ではないがな」

「あ、姫ちゃんの口ぐせだよ」

「そうじやあ。神じやあ。すごいだろう？」

「神様って、じやあ何の神様なんですか？」

「本気にするなよ。じいさんの世迷言だよ」

「わしは豆腐の神じやあ」

「豆腐の神？ なんだ、そりゃ。聞いたことないぞ。何を言ってんですか？」
「お前たちは、この町にある豆腐地蔵にいつもお供えをしてくれている。わしや豆腐の神だから、そんなお前たちにいつもご利益を与えてるんじやああ」
「豆腐地蔵？ あの豆腐地蔵は、そばにある豆腐屋が豆腐を売るために置いたものなんじょ？」
「お前たちの事情は知らんが、ここには古くから豆腐を祀る地蔵があった。最近、熱心に豆腐を置いてくれるこの町のお前たちにご利益を与えてやったんじや。ただこんな姿では誰も信じないだろうから姫ちゃんに化けて、施しをしてたんじやあ」
「最初から言ってくれればいいじやないですか。そんなややこしい事しなくても」
「おい、あの女の子の正体は本当にこの爺さんらしいぞ」
「え？ 姫ちゃんがこのジジイ？ 冗談じやねえ。おい、ジジイ姫ちゃんを返せ」
「落ち着け。そうじやねえよ。このじいさんが姫ちゃんなんだよ」
「いや、もっと落ち着け、じいさんじやなくて豆腐の神様だからな」
「ちょっと、みんなうるさいわよ」
「あ！ 姫ちゃんだ。いつの間に？」
「いつも豆腐をありがとう」
「え？ どうなってるんだ？」
「だから、姫ちゃんが豆腐の神様なんだよ」
「ジジイはどこ行ったんだよ。おい！ ジジイを出せ！ 姫ちゃん、ジジイを出せよ！」
「あべこべになってるじやねえか」

さあ、豆腐の神様のおかげもあって少しずつ町も活気を取り戻します。

「おい、本当かい？」
「うんなんだよ。おれ何度も見たんだから」
「おいおい、どうしたお前たち」
「あ、ご隠居さん。この野郎が見たってんですよ。豆腐の神様が夜な夜な何か探してるって」
「え？」
「本当ですよ。夜中、目を覚ましてはばかりに行こうと思って外を見たら、豆腐の神様がキヨロキヨロしながら歩いてたんですよ」
「なんだって？」
「夜中ですよ？ 小町、小町ってささやきながら」
「小町？」
「誰か探してるようだね。様子がおかしいんですよ」
「何かあるのかもしれない。私達はさんざん世話になってるんだから事情だけでも聞いてみよう」
「豆腐の神様、何かあったんですか？ 私達に出来る事があるかも知れねえ。訳を話しちゃくれませんか？」
「嫁に逃げられたんじやあ」
「は？ 嫁に逃げられた？」
「そうじや。わしがあまりにずぼらな性格だから嫁に逃げられて探しておるんじや」
「なんだ、そりゃ。豆腐の神様が嫁に逃げられた？」
「探してあげようじやねえか」
「え？ お前なに言っての？」
「いや、だって、この町のみんなはこの豆腐の神様のおかげでいろんな良いことがあったんじやねえか。ご利益をもらってるんだから、助けてやろうじやねえか」

「おお、感心なやつだ。お前の家にニガリの雨を降らしてやろう」
「嬉しくないです、それ。いえ、神様にはたくさん助けていただいたんですから。で、その奥さんの名前は？」
「言いたくない」
「それじゃ探せないだろよ。人が親切にしてやってるのに」
「いいじゃねえか。言いたく無いんだから」
「だってよ」
「いいんだよ。源ちゃんが夜中に聞いてるんだよ小町って言いながら探してたって。何か事情があるんだよ。ねえ神様、お嫁さんってのはどんな特徴がありますか？手分けして探しますから」
「特徴？まあこれといった特徴はないんじゃが、しいて言えば、必ず三秒に一回光るんじや」
「すごい特徴ですね、それ。三秒に一回光る？そんな分かりやすい特徴があるのに見つからないんですか？」
「全然見つからない」
「他にありますか？」
「きれいな水が好きでな。その上、人が居ないと寂しがる」
「それゲンジボタルじゃねえか？」
「ホタル？なんじゃそれは」
「そうか、神様は姿を変えられるんだ。神様の嫁ってのもホタルの姿になっててもおかしくねえ。この豆腐の神様の奥さんは蛍の姿になって、そこの川べりに居るんじやねえか？」
「なるほど。いや、待てよ、今はちょうど蛍の時期だから、何匹もいる蛍の中から、奥さんなんて探せないよ」
「いや、そんなことない。今はヘイケボタルの時期だ。ヘイケボタルはもっと点滅の頻度が多い。ぱつぱ、ぱつぱって光るから、その中にゲンジボタルの三秒に一回の頻度の蛍がいたら、それがこの神様の奥さんだ！神様！奥さんの居所絞れましたよ。行きましょう！」

さあ、夜になるとみんなして神様を引っ張り出す。

「神様！神様！こっちですよ！こっち！」
「お、おおお。わしの嫁がこんなにいるのか！」
「神様は蛍を知らなかつたんですか？」
「こんなにはいらん。一人でいいのじや。この年だ、身体がもたん」
「人間っぽい神様だね」
「神様、これは私達の世界ではホタルって言うんです」
「身体がもたん」
「落ち着いてください。今はヘイケボタルなんですよ。パッパ。パッパって光ってるのは偽物です。三秒に一回光ってるのがいれば、それが神様の奥さんです！」
「ええ？どこじや、どこじや。うーん」
「みんなで探すぞ」

必死に探しますが、なかなか見つけられない。

「あ！神様！あれじやないですか！ほら、三秒に一回！あの蛍が奥さんですよ！」
「え…。ああ！おい！そこにいたのかああ！まちこ！」
「神様の奥さんの名前、まちこだよ。小町じゃねえよ」

「まちこ！まちこ！すまんかった。もう、豆腐にマヨネーズはかけないから、帰ってきてくれ」
「どんな理由で喧嘩してんだよ」

なんてんで大騒ぎ。

「ねえじいじ、あのおじいさんホタル見て喜んでるよ」
「ああ、そうだね。ちょいとそこのご老人、ホタルはきれいでしょ。初めて見た感想は？」
「わしやホタルみるのは初めてじゃない」

この日から神様が姿を消す。一年後、違う光り方をする螢が見つかる。ゲンジボタルでもなく、ヘイケボタルでもなく、新たな螢。神様はきっとこの螢になったに違いない。この新しい光り方をする螢は「ヒメボタル」と名付けられた。

※自由に。

おわり